

すい管上皮に存在

理研、がん発症原因探る

理化学研究所のグループは、膵臓(すいぞう)の組織を作り出す元となる幹細胞が「すい管」と

浜市立大学教授)らは、生まれればかりのマウスの子どもを使って研究した。

種類の細胞に成長できることも確認。幹細胞であることを突き止めた。

「膵臓がんの発症や肝臓などほかの臓器への転移メカニズム解明につながる可能性がある」と話している。

いう部分に存在していることを、マウスの実験で突き止めた。体性幹細胞は体内に長くとどまるため、遺伝子変異が蓄積してがんの発症原因になると考えられている。その

マウスの膵臓を酵素でバラバラにし、表面に発現しているたんばく質の種類によって細胞を分類。「CD133」というたんばく質を発現している細胞が、高い増殖能力を持っていることを発見した。この細胞は血糖値調節ホルモンであるインスリンを分泌している

CD133は、膵臓と十二指腸をつなぐすい管の上皮細胞で特徴的に働くことが知られている。このため、膵臓の幹細胞はすい管の上皮細胞であり、ここから幹細胞が様々な組織に成長して膵臓を形作っていることが分かったという。

こうした幹細胞は、通常の細胞よりも長い期間にわたって体内にとどまるため異常が蓄積しやす

理研発生・再生科学総合研究センターの谷口英樹ユニットリーダー(横

すい島β(ベータ)細胞など、膵臓を構成する六

常の細胞よりも長い期間にわたって体内にとどまるため異常が蓄積しやす